令和７年度　第４回半田市総合計画市民評価委員会
（第７次半田市総合計画改訂に係る市民評価委員会④）議事録

開催日時	令和８年２月１０日（火）	９時３０分～１２時００分
開催場所	大会議室	
会議次第	**【議題】** パブリックコメント結果報告および意見への対応について	
出席委員	委員長：千頭 委　員：鈴木、小柳、上野、岩橋、曽根、杉本、榊原、伊藤、沢田 ※敬称略	
市出席者	市長、企画部長	
事務局	企画課長、斎藤、籾山	
	【議題：パブリックコメント結果報告および意見への対応について】 （事務局） 令和７年１２月２６日から令和８年２月１日の期間で、総合計画改訂版のパブリックコメントを実施した。 提出された意見は全部で２通１１件であった。 内容は全て個別具体的な意見であったため、関連する個別計画の所管課と意見を共有し、回答を作成した。 回答は、市ホームページへの掲載のほか、意見回収箱を設置した市内公共施設に設置予定。 【１１件の意見とそれに対する回答について説明】 （委員） いただいた意見を今後の取組に活かしていくということが伝わるような回答になるとよい。 （委員長） 回答全体として総合計画のどの部分に記載がされているか明記されており、丁寧な回答になっている。 意見への対応一覧の冒頭に、いただいた意見は関係課に共有し、協議したうえで回答の作成をしていること、また、今後の行政運営の中で意見を参考にさせていただくことを記載できるとさらに丁寧でよい。 （企画課長） パブリックコメントへの対応は、企画課ではなく、半田市長から回答することになるため、総合計画に関わらず他の計画においても、いただいた意見を関係課に共有するのは当然であり、あえてそのことを記載することは	

	しないが、市にとっては当たり前であっても市民には伝わっていないということは十分に理解した。 （委員） 知多半島サイクリングロードについての意見が出ているが、所管はどこか。 （事務局） 所管は県である。国道や県道であっても、市民からは市に問合せをいただくことが多い。市民からの意見を県など所管している機関に伝えていくことも市の役割だと思っている。 （委員） 所管が市であると勘違いされてしまう可能性もあるため、県とも協議をしていくという一文を加えてもよいと思う。 （委員） 意見の内容は、市が既に取り組んでいるものが多く、市の取組が市民に伝わっていないと感じた。 （委員長） 個別施策において市民とのやりとりが足りないため、総合計画のパブリックコメントの際に、個別具体的な意見が多くなっているともいえる。 各部局が施策を推進するときに、市民とのやりとりを十分に行っていれば、総合計画に対してではなく個別の施策に対して直接意見が出るようになるのではないか。 また、市民も情報を受け取る姿勢をもつことが必要である。 （委員） 今後は、学校の図書館など学生の目に留まる場所へパブコメを設置することを検討するとよいと思う。 若い世代の声を聞くことができ、若い世代が半田市の取組を知ることで半田への愛着醸成につながるのではないか。 ―議題終了― 【事務局からの事務連絡】 【総合計画に関する委員からの意見】

	（委員） 市民評価委員になり、市でこのような会議が開催されていることを初めて知った。 そもそも市の取組を知らず、初めて聞くような単語もあったため、施策評価の際は、事前に施策の内容等についてレクチャーがあると、より意見を言いやすくなると思う。 （委員） 市民評価委員会を通して、半田市が未来を見据えてこのような計画を作っていることを知ることができた。そのことをより多くの人に知ってもらい、市への愛着醸成を深めるため、例えば、市内の学校で出前講座を行うなど、若者が総合計画に触れる機会を作るといいと思う。 （委員） 「チャレンジあふれる都市・はんだ」というキャッチフレーズがあるが、市民には伝わっていない。市は頑張ってチャレンジを進めていると思うが、市民をうまく巻き込めていないので、市民への動機付けができるとよい。 （委員） 市民評価委員会は自由に発言ができる環境でよかった。チャレンジ 2030 は、高い目標を掲げて試行錯誤しながら取り組んでいることが分かってよいと思う。 （委員） 市は情報発信をしているが、情報を取りに来た人にしか伝わっていない。情報を取りに来てもらうための工夫が必要である。 （委員） 力のある市民はたくさんいる。そのような方に総合計画や市の取組を知ってもらうことで、そこから波及してより多くの市民に伝わっていくのではないか。 （委員） 施策評価について、現在の基本施策ごとに評価する方法も悪くはないが、いくつかの事業が組み重なって成り立っている中で、個別の事業の評価が良いと基本施策の評価も良いと言えるのか疑問である。後期計画の評価に向けて、評価方法の見直しも検討できるとよいと思う。 ―意見交換会終了―

	【写真撮影】 【市長・企画部長との懇談会】 （市長） ーこれまでのお礼ー （委員） 総合計画の改訂にあたって、将来人口の修正も行われた。修正前から5,000人減少ということで、出生数が著しく減っていることを痛感した。そういったなかで、選ばれるまちに向けた取組を推進するとともに、取組の情報発信をすることが非常に重要になってくると思う。 （委員） 半田市が他の自治体と比べて優れていること、劣っていることは何かという視点を持つことも大切だと思う。総合計画には、「チャレンジあふれる都市・はんだ」というキャッチコピーがあるが、他の自治体と比べて半田はチャレンジあふれているのか、客観的な視点を持って後期計画を推進していってほしい。 （企画部長） チャレンジの内容も多岐に渡っており、一律の基準で比較することは難しい部分もあるが、このキャッチコピーによって、職員が前向きになっているところは成果が出ていると思う。実際に、最近の市の取組で「実証実験」という言葉を頻繁に聞くようになった。まずはチャレンジしてみようという雰囲気が徐々に浸透してきていると感じている。 （委員） 職員の間ではそのような雰囲気が醸成されていると思うが、その雰囲気を市民や地元企業にも波及していってほしい。 （委員） 夏休みの間だけ子どもを預けられる施設が増えるとよい。今後、そのような取組を進めていく予定はあるか。 （市長） 子どもの居場所づくりは現在進めているところである。直近では、横川小学校と亀崎小学校で学校の中に子どもの居場所を作ることを進めている。成岩では７月に地域共創センターがオープンする予定である。子どもの居場所だけでなく、地域の人が集まる場所になるとよいと思っている。

	（企画部長） 地域共創センターは公民館よりも柔軟に利用することができる。管理運営は地域の方たちで行っていくため、色々な要望を出していっていただきたい。 （委員） 人口減少が進む中、町内会など地域の担い手不足が加速化している。地域共創センターは、持続可能なコミュニティを構築するという考えもあっての設立という認識でよいか。 （企画部長） 現在は多くの自治区があり、各自治区で様々な行事などを実施しているが、これが自治区の負担になってきている。そのため、従来の自治区を小学校の単位に広げて行事などを一緒に行うことで、各自治区の負担軽減につなげたいという考えがある。今後は小学校や公民館の建替えに合わせて小学校区に１つ地域共創センターを設置し、そこを拠点にコミュニティが形成されていくことを目指して取組を進めている。 （市長） 自治区のあり方については、課題意識を持っている。 市民の皆さんが自治区に対して求めるものを把握しながら、市が自治区に寄り添って今後のあり方を検討していきたい。 （委員長） コミュニティは何かをやらなければいけないというものではく、防災や祭りなど、各コミュティが、自分たちがやりたいこと、課題に感じていることについて取り組んでいくようにすれば、地域の方も参加しやすくなると思う。コミュニティを従来の自治組織の延長としてしまうと、担い手が減ってきてしまう。 （委員） パブリックコメントの中に、「半田が都心部のベッドタウンであることを売りにするのであれば」という意見があった。市民のなかには半田がこういう地域だという認識を持っている方もいることを知った。 半田は食べて寝る場所だという意識を持つ市民もいるのかと思うと、市民一人一人が半田に愛着を持ち、この地域で自分に何ができるのかという意識が芽生えるようになるといいと思った。 市民アンケートを毎年実施しているが、市民の方が半田をどのように評価しているのか、注目していきたい。

	（委員長） 総合計画の指標の管理が市民アンケートの目的の一つだと思うが、市民が半田をどんなまちだと思っているか、どんなまちにしたいのかを聞くような項目を入れてもいいかもしれない。 （委員） 身の回りで、半田にゆかりはないが半田に家を購入した人がいる。そういった方たちが半田は子供を産み育てていくまちとして十分な環境が整っており、住んで良かったと言っていることを、行政や市民が周知し、多くの方に半田で暮らす魅力が伝わればいいと思う。半田市の子育て支援施策は確実に充実してきていると感じる。 （市長） 子育て支援施策を進めることで出生数の増加につなげていく必要がある。子育てのしかたや働き方が多様になるなかで、半田で子育てをしようと思ってもらえるような施策や半田に住む人の人生が少しでも豊かになるような施策に力を入れていきたい。 （委員） 委員会を通して、市が色々なことに取り組んでいるということが分かった。特にチャレンジ 2030 は難しいことにも前向きに取り組む姿勢がうかがえて非常に評価できる。今後は、このような市の取組をより多くの方に知ってもらうための工夫が必要になってくると思う。 （市長） 関心がある情報は自ら調べにいくが、関心がない情報をどのように市民へ届けていくかは課題である。 半田のことを知ってもらうと、その良さに気づく方が多いと思う。まずは知ってもらうための努力が必要であると常々感じている。 （委員長） 職員は半田市の広報大使である。職員一人一人が半田市を PR できるような状態を作ることができるとよい。 ―終了―